

『ラーマヤナ』から広がる妄想

東南アジアを理解するために、インドを知る必要がある。

そう思った理由を、私はうまく説明できない。ただ気が付けば、ここ 3 年ほど、インドの哲学や思想に関する本を読み続けていた。読み進めるうちに、次第に見えてきたのは、インドと東南アジアが、歴史や宗教、そして物語を通じて、長い時間をかけて結びついてきたという事実だった。その象徴とも言える存在が、インド古代の二大叙事詩の一つである『ラーマヤナ』だ(もう一つは『マハーバーラタ』)。

『ラーマヤナ』の「ラーマ」は王子の名、「ヤナ」は「行く」「旅」を意味し、直訳すれば「ラーマ王子の旅」とでもなるうか。コーサラ国のラーマ王子が、さらわれたシータ妃を救い出す旅に出るといふ、この物語は、形を変えて東南アジアで広く親しまれてきた。

タイでは、『ラーマヤナ』は『ラーマキエン』として編纂され、国の重要な物語として語り継がれている(インドネシアやカンボジアでも、それぞれ独自に編纂された)。バンコクにある王宮寺院ワット・プラケーオでは、その物語が回廊の壁一面に描かれており、目にしたことがある人も少なくないだろう。この「ラーマ」という名前は、タイでは英雄の名として受け継がれている。現在のタイ国王が「ラーマ 10 世」と称されていることは、その一例である。

さて『ラーマヤナ』でも『ラーマキエン』でも、ラーマ王子の旅を支える存在が、猿の神ハヌマーンである。勇敢で、忠実で、ユニークな表情を持つこの存在は、タイではおなじみだ。王宮だけでなく、スワンナプーム国際空港にもハヌマーンの像は置かれ、タイを訪れる人々を迎えてくれる。どこかで見たことが

ある、と思った。そう、ハヌマーンは『ウルトラマン6兄弟と怪獣軍団』という映画に出ていたのだ(日本とタイの合作である)

『ラーマヤナ』の物語の広がり、タイ

に限られたものではない。猿が旅を助けると聞いて、『西遊記』の孫悟空を思い浮かべる人も多いだろう。実際に、『西遊記』が『ラーマヤナ』の影響を受けているとする研究もあるという。さらなる連想が許されるのなら、わが国の『桃太郎』もそうかもしれない。猿のほかにも犬と雉もいたけれど、それは日本的なアレンジかもしれない。アジアだけではない。子どもころに観た『スターウォーズ』を思い出すと、毛むくじゃらで、忠誠心の強いチューバッカの姿がハヌマーンに重なる。このように、私の妄想は広がり続けた。

『ラーマヤナ』という古い物語からの連想が妄想にまで広がったのは、この物語の内容だけが理由ではないようだ。分断ばかりが強調される現在に心が抵抗した結果かもしれない。けれど、こういう時代にはこんな妄想も悪くないと思う。

アジアは多様な地域であり、アジア研究の第一歩はその多様性をしっかり理解することだ。しかし同時に、その背後にある共通性やつながりにも目を向ける必要があるのではないだろうか。一見すると異なる国や文化も、物語や価値観を通じて結ばれている。

インドを訪れた岡倉天心は、「アジアは一つ」と語った。彼が見たのは、均質なアジアではなく、一見多様に見えながら底流で結びつくアジアだったのではないだろうか。

(おおいずみ けいいちろう・アジア研究所教授)

アジアの窓



* 研究所だより *

毎年定例の「アジア研究所公開講座」を以下の通り開催します。

共通テーマ: 「弱肉強食の世界と習近平の中国」

開催日: 5月9日、16日、23日、6月13日

(全4回、いずれも土曜日)

時間: 14時から15時30分

※対面のみでの開催となります。

定員: 100名(各回とも定員になり次第締切)

受講料: 無料

各回講演の講演題および参加申し込みは下記のURLからお願いいたします。

<https://www.asia-u.ac.jp/research/asian-institute/extension.html>

新年度を迎え、移り行く海外情勢を適時に発信すべく精進してまいる所存です。問い合わせ、ご要望とございましたらいつでもお知らせください。

(koza@asia-u.ac.jp)